

鼻副鼻腔炎

(蓄膿症)



あいの里耳鼻咽喉科
院長
森合 重誉氏

先生のプロフィールは
P43へ

カビ由来の副鼻腔炎は急激な重篤化の心配も。
2週間以上続く鼻の症状は一度耳鼻科の受診を

顔面骨内には鼻腔につながる空洞があります。頬部、眼の間、その後方にあり副鼻腔と呼ばれます。役割としては声の共鳴腔、外傷からの緩衝つまり重要な部分を守っていると考えられています。正常な副鼻腔では、洞内の粘膜の纖毛運動により換気と分泌物、鼻汁の排泄、鼻内に入ってきた異物の排泄が自然に行われています。感冒などで粘膜の腫脹が起きると、纖毛の動きが悪くなり、通路が狭まったり閉塞してしまいます。こうしてよどむことで細菌が繁殖しやすくなり、悪臭をともなう膿汁が出たり、頬部の違和感や頭痛が起きます。これが副鼻腔炎です。

感冒に引き続いて起きるほか、歯根の感染でも起きることがあります。またアレルギー性鼻炎を持つている方は鼻腔の粘膜が腫れているため、副鼻腔炎にかかりやすいといわれています。風邪は治ったのに鼻汁が止まらない。一般的な風邪や鼻炎ではサラっとした鼻汁が出てくるのに対し、どろっとした黄色っぽい鼻汁が出てくるのも特徴と言えます。ほかに喉に鼻汁が落ちる(後鼻漏)、咳が止まらなかつたりします。また顔を下に向けるとおでこに鈍い痛みが出ることもあります。こうした自覚症状がある方にはレントゲン

を撮ることで、空洞が白っぽく濁って映ることで、副鼻腔炎の診断が付きまします。治療は、以前は鼻腔内を洗浄するという方法が多く行われてきましたが、現在ではさまざまな薬が開発され、一般的には内服薬を中心に、漢方薬や、細菌感染が原因の場合には抗生剤も使用するほか、鼻の吸入処置なども併用しながら保存的治療を行っていきます。鼻腔内の洗浄による治療が主体だった頃は、症状が改善するまでに3カ月ほどかかりましたが、現在ではほとんどの方が1カ月ほどで治るようになりました。ただし、患者さんによって個人差はあります。1カ月を経ても治りが悪い

場合には、薬を変えてみるほか、CT検査による診断のうえで、手術治療を行うこともあります。手術は、かつては唇の裏側部分を切開して骨を露出させ、鼻汁がたまる副鼻腔の通りを良くする手術を行っていましたが、現在では内視鏡を使って、副鼻腔内の異常がある粘膜を除去する、全身麻酔下での手術が主流となつていきます。また、鼻の構造的に鼻中隔(鼻の真ん中の仕切り)の湾曲や、鼻腔の開き方などが副鼻腔炎の原因となつている場合には、副鼻腔炎を起さしづらくする鼻中隔の矯正手術などを一緒に行うこともあります。術後は鼻出血しやすいほか、手術侵襲や鼻に詰め物をするこ

とでは細菌が増えることがあるので、感染を防止する点滴管理が必要となるため、10日間ほどの入院治療となります。アレルギー性鼻炎を持つている方の副鼻腔炎では、薬が効きにくいほか、一度良くなつても再発しやすいという特徴があります。また、レントゲン画像では副鼻腔内がきれいでも、鼻茸というポリープができている場合があり、これはCTで検査をしなければ分かりません。1個だけであれば心配ありませんが、鼻腔内を塞ぐようにつづら折り状に複数できている場合には手術が必要です。さらに、アレルギー主体の慢性副鼻腔炎ではぜんそくを合併していることも多く、逆にぜんそくの症状が管理されている方で、たまたま耳鼻科を受診して鼻茸ができていたというケースもあるため、ぜんそくをお持ちの方で特に後鼻漏の症状が気になる場合には、放置せず耳鼻科を受診しましょう。この他にも、典型的な風邪由来の慢性副鼻腔炎とは異なる、薬が効かないカビ由来の真菌性副鼻腔炎というものがあり、この場合には手術治療が第一選択となります。特に真菌性の副鼻腔炎の中には、急激に病変が拡大して副鼻腔に隣接する骨を壊していく性質の副鼻腔炎もあり、非常にまれですが、上顎がんのような眼球まで摘出しなければならぬような手術が必要となることもあるため、積極的かつ早めの手術治療をお勧めいたします。その意味では、「たかが副鼻腔炎」と思われがちですが、決して軽く考えてはいけな